

これは余が余の為に  
頑張る物語である 2

文月ゆうり

*Yuuri Fumitsuki*

RB

レジーナ文庫

◀ □□

学校で会った、黒髪の少年。  
とても頭がいい。

## ▲ ララ

リリにできた、  
初めての人間の友人。  
勉強が苦手。

## ▲ シュトワール夫妻

リディシア (左) / ジーナヴァルス (右)

リリの両親。子供たちを愛して  
やまない若き夫婦。

## ◀ ジェイド

リリの父の騎士団に所属の騎士。  
ルルと繋がりがあがあるようだが……

## ▲ ルル

リリの想い人にして、  
世界で唯一の存在である  
神子。

## ▲ アル

リリの実の兄。大精霊シルヴァーン  
と契約を結んでいる。

## ▲ リリ

転生先の異世界で幸せ追求中の、  
自称“余”な女の子。  
恋に友情に勉強に、邁進中！

## ▲ ルディ

パパが連れてきた少年。  
光る髪と目をもっている。

## 目 次

これは余が余の為に頑張る物語である 2 7

書き下ろし番外編 危険なクッキング 355

これは余が余の為に  
頑張る物語である 2

## プロローグ

皆の者、元氣であるか。余、である。リリアンナ・ユミリ・シュトワールであるぞ。うむ、我らの仲である。気軽にリリちゃんと呼ぶがよい、許す。

うむうむ、子供とて、侮るなかれ。余、ただの子供ではないぞ。なんたって子供様である。しかもすこぶる特殊な子供様であるぞ。なんと、余は前世の記憶というやつを有しておるのだ。しかもそれは、異世界にある、日本という国の知識だぞ！

はっはっは。崇め奉るが良いぞ。リリちゃん、スゲー！

余、相変わらず、サラサラの栗毛にお目めはパッチリとした愛らしい子供様なのじゃ。赤子としてこの世界に生まれてから、すくすく成長しておるぞ。

さて、余が転生したこの世界には、大きな影響力を持つ神子様という存在がいる。その神子様を守る騎士団もあって、なんと余の生まれたシュトワール家は代々その騎士団長を任されている名家なのじゃ。だからリリちゃんのパパが、今の騎士団長だよ！ パ

パ、スゲー！

そんな余も、精霊や魔法が存在する世界に誕生して早、五年。それなりに楽しんで生きている。季節は、そろそろ冬を終えようとしておるな。うむうむ、この五年、本当に色んなことがあった。なんか変な組織に殺されそうになったり、精霊と一騒動あったりと、本当に色々じゃ。

余も、成長するわけじゃ。もう何が起きてても驚かんぞ。——と、思っておったのじゃがな。

「……よもや、死体の第一発見者になろうとは」

何が起きるか分からん世の中だの。……リリちゃん、どーしよー！

いや、今、家のお庭に、うさちゃんとお散歩に来てたの。ルデイ兄ちゃんお手製のクッキーを持って。そしたら、私と同じ年ぐらいの女の子が、あお向けで倒れてたんだよー！

髪は、私と同じく栗毛で、長さは肩ぐらい。白いワンピースを着ている。薔薇色の頬が可愛らしい女の子だ。

いやいや、違う。冷静に分析してる場合じゃない。何故、その女の子が我が家のお庭で行き倒れているのかだよ！ 行き倒れ、だよな？ さっきは死体だと思ったけど、よ

くよく見たらお腹、上下してるもん。ねー、うさしゃん！ ね！  
リリちゃん、大好きなうさしゃんぬいぐるみをぎゅっと握ってみるよ。

「し、死んでますかー」

「死んでないよー」

死体が喋った！ と、恐れおののく私の前で、むくりと女の子が起き上がる。

「待ちつかれて、眠ってただけだよ」

それも凄いな。この寒い冬に、外で寝てるとは。

感心する私に、女の子はにっこりと笑いかけてきた。ふんわりとした栗毛が、さらりと動く。

柔らかな雰囲気の子だ。

でもこんな幼い子供が、何故我が家の庭で寝ていたのか。

「私、あなたを待ってたの」

「リリちゃんを？」

「うん」

はて。私は彼女とは初対面のはず。なのに、待っていたとは？

女の子は、ほわほわと笑う。

「私、あなたと友達になりにきたの」

さも当然とばかりに、さらりと言ったのけた女の子。

えっと。

「その前に、不法侵入について、語ろうか」

混乱した私は、取り敢えずそう言っておいた。

「ふほうしんにゆうう？ あなた、難しい言葉をしってるのね」

女の子は、相も変わらず笑顔のままだ。

毒気を抜かれた私は、右手に持っていたバスケットを女の子に差し出す。

「……一緒に、食べる？」

「いいの？ ありがとう！」

これが、私と女の子——ミディララ・ルーとの初めての出会いである。

聞けば彼女は我が家の近くに住んでおり、前々から我が家の立派な庭に興味があったという。

外の柵からこっそりと覗いたりしていたらしい。

そして、ある日。庭で自分と同じぐらいの歳の女の子が、一人寂しそうにしていたのを見かけ、それ以来ずっと気になっていたそうだ。

「一人で、誰かを待つてるみたいだったから」  
 ……多分、私がメルたちを探してた時のことだ。赤ちゃんだった私と遊んでくれた精霊たち。ある時を境に、急に消えてしまった、私の初めての友達——  
 ミディララは、その「誰か」に自分がなろうと思ったらしい。単純な考えだ。単純だけれど、優しい考えだ。

「……私、誰かになれた？」

私は、首を横に振る。メルたちの代わりは、誰もなれない。

ミディララは、残念そうに顔を曇らせる。

「でも——」

私は、続けた。

「でも、ミディララはミディララだよ」

「え？」

不思議そうにするミディララに、私は笑みを浮かべる。

「お友達に、なってください」

私がそう言えば、ミディララは輝く笑顔を見せてくれた。

私は、ずっと友達に飢えていたのかもしれない——そう思った。

「余は、リリアンナ・ユミリ・シュトワール。リリちゃんとよぶがよい。ゆるす」

「よく分かんないけど、リリちゃんね！ 私は、ララちゃんでもいいよ！」

ララちゃんは、さらっと流すことのできる子でした！

そうしてこの日、私に大事な友達ができた。

## 第1章 幸せな日常

春がやってくる。冬はもう終わりじゃな。

ララちゃんと友達になってから、毎日が浮き浮きしておる。友達、素晴らしいじゃ！

ララちゃんは、優しい女の子だ。悲しい時には側に寄り添ってくれて、嬉しい時には一緒に笑ってくれる。そんな風に人の気持ちに添える、不思議な雰囲気を持っている。そんなララちゃんと一緒にいられて、余は幸せ者じゃよ。

ララちゃんには、何でも話せてしまうのじゃ！ 余の、恋の話もしたぞよ。すると、「リリちゃん、好きな人がいるの？ 凄いい！」

と、感心されたのじゃ！ 余は、鼻高々だったぞ。恋とは、日々を彩る素敵なものじゃ。ルル様を思うと、心がぼかぼかするのじゃ。そう、ルル様——  
ルル様は現代の神子様で人間と精霊の絆を守っている人。私の好きな人は、そんな凄いことをやってるんだ。

そんなわけで、余の日々は、実に美しいものなのだよ。えへん。胸も張っちゃうぞ！  
「……リリ。何してるの」

おや、アル兄ちゃんではないか。後ろには、ルデイ兄ちゃんもいるの。  
何をしてるのか。うむ、なかなか良い質問じゃの。

「お庭で、日向ぼっこしつつ、自分の偉大さに酔いしれてた」  
お気に入りのぬいぐるみのうさちゃんも一緒だよー！ あったかくて、気持ちいいーの！

「なあ、ディアス。俺、リリの教育間違えた気がするんだ」

「……奇遇だね、僕もだよ」  
兄ちゃんたち、失礼だよ。リリちゃんは、至って真面目なのに！

「余の素晴らしさが分からぬとは、まだまだよの」

私は、びしりと兄ちゃんたちを指さし、やれやれと首を振る。本当にやれやれだよ。

アル兄ちゃんは、深くため息を吐いた。幸せ、逃げるよ？

「リリの言葉遣い、僕が何とかしないと……」

アル兄ちゃん、何やら使命感に燃えているようだ。リリちゃん、そんなにおかしいかなあ。普通だと思っようー！



一人で苦悩するアル兄ちゃんの本名は、アルトディアス。ママに良く似たふわふわの金髪に、青い目の凛々しい顔立ちの男の子だ。キリツとした表情は、パパそっくり！私とは、七歳離れているんだよ。

「まあ、リリの言葉は今に始まったことじゃないからな」

ルディ兄ちゃんがフォローしてくれる。さっすが！ あつ、ルディ兄ちゃんの本名は、ルディガイウスだよ。アル兄ちゃんとは、同い年だけど、双子じゃない。ルディ兄ちゃんは、私が赤ちゃんの時に引き取られて、我が家にやって来たんだ。

ルディ兄ちゃんは、濃い青色の髪と濃い緑色の目を持つ美少年だ。よく女の子に間違われて怒っている。でもって何と！ ルディ兄ちゃんは、私の前世のお母さんの魂をその体に宿しているのだ！ ばばーん！ リリちゃん、ルディ兄ちゃんを通してお母さんと魂の再会も果たしたよ。まさか、別の世界で会えるなんて。本当にビックリだ。

そんなこんなでルディ兄ちゃんの背景は色々複雑だ。けど、そんなの関係ない。ルディ兄ちゃんも私の大事な家族だ。

そうそう、ルディ兄ちゃんは、神子様しか持たない二色の精霊色持ちだったりする。精霊色は、精霊からの祝福された証なんだよ。髪とか目がキラキラ光るの。改めて思うと、ルディ兄ちゃんって色々てんこ盛りだな。わあお、ルディ兄ちゃんスゲー！！

あ、でもルル様曰く、ルディ兄ちゃんのは本当の精霊色じゃないらしいんだけどね。

ここにも、色々複雑なことがあるみたい。でも、何でも知っているルル様、ステキ！ さっつ！ だけど、ルル様のことはアル兄ちゃんの前では言えないの。アル兄ちゃん、私の恋の話に敏感だからなあ。話せないのって、つまんなーいよーう。

「アル兄ちゃんの、ケチー」

「いきなり、貶された!？」

アル兄ちゃんは、シヨックを受けた。リリちゃんは、うさしちゃんの手でアル兄ちゃんを慰めるべく、撫でようとしたけど拒否された。がーん。

「だから、ぬいぐるみじゃあ愛を感じられないよ!？」

「うさしちゃんの愛は、重いのに?？」

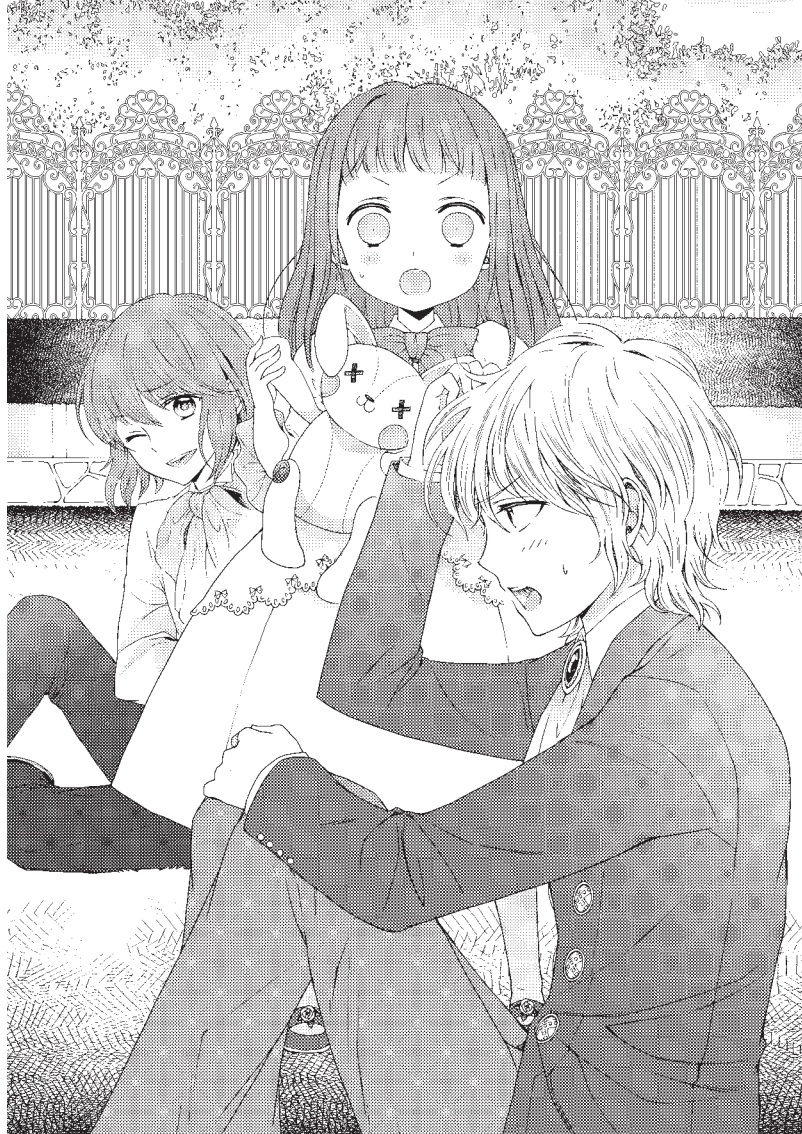
「本当に、勘弁してよ!？」

うむ。アル兄ちゃんの突っ込みは、相変わらず切れがある。ルディ兄ちゃんなんか、お腹抱えて笑っているし。

「ルディも、笑わない!？」

「お、おう」

アル兄ちゃんは、大変ご立腹だ。やり過ぎた。てへ。



そんな風に三人でじゃれていると、私たちを呼ぶ声が聞こえてきた。  
あ！ ママだ！ ママー！

我が家のお屋敷から、ママが歩いてくる。ママは、もう直ぐ三十歳になるのに、全然  
そうは見えないくらいとつても可愛らしい人だ。緩く波打つ金色の髪を背中に流してて、  
まるでお姫様みたい。リリちゃんと同じパッチリした目は、青色。ママ、大好き！  
今日も、ドレスが似合ってます！ 普段着だけど、ドレス。異世界凄ーい！ 名前は、  
リテイシアって言うのー！

「貴方たち、そこにいたのね」

ママが、ふんわり笑う。

「おやつ時間だから、呼びに来たのよ」

「おやつ！ わーい、おやつだ！ やったね、うさちゃん！」

「分かりました、母上」

「今日のは、リュハ地方の伝統菓子だからな」

「今日のおやつ、ルデイ兄ちゃんが作ったの？」

ルデイ兄ちゃんは、自慢げに鼻を鳴らした。ルデイ兄ちゃんは、お菓子作りの天才な  
のだよ。

「おう。だから、味わって食えよ」

「はい」

「じゃあ、手を洗いに行こうか」

そう言って、アル兄ちゃんは私の手を握った。私にもぎにぎ。

「おっやつ、おっやつ」

自作の歌を口ずさみ、私はママのもとへと歩く。ママは、私たちの様子をにこにここと笑って見ている。

幸せだなあ。

「ママあ、パパは？」

「ヴァルなら、書齋で仕事だよ」

なんだあ、パパ珍しくお家にいるのに、お仕事しているのかあ。

……よし、後で突撃しようっと。

おやつを食べ終えた私は、うさしやんをお供に、とある部屋を目指す。そう、パパの書齋だ。パパがいるのに、構ってもらえないのは嫌だもん。パパー！

書齋に着いた私は、ノックもせずにガチャリとドアを開ける。

「パパー、リリちゃんだよー」

中を覗くと、ソファアに腰掛けて書類に目を通しているパパがいた。

ジーナヴァルス・ユミリ・シュトワール。我がシュトワール家の当主であり、神子様みこであるルル様をお守りする神護騎士団じんごの団長でもある。リリちゃん自慢のパパだ。パパ、スゲー！

パパは、長い栗毛を後ろで結び、キリッとした顔立ちの鋭い眼光の持ち主。でも、凄く優しいよ！ リリちゃん、パパ、好きー！

「リリアンナか」

パパが書類から顔を上げて私を見た。わーい、パパー。嬉しくなって、私はパパに駆け寄る。

「パパ、お仕事大変？」

「いや。今、一区切りついたところだ」

お、ということはお！

「パパ、遊べるの？」

私の問い掛けに、パパは緩く首を振る。

「遊べはしない。だが、話ならばできるから安心なさい」

「やったー！」

私はパパの隣に座る。あつ、喜び過ぎてうさしやんを床に放り投げちゃった！ ごめんね、うさしやん！

「パパ、あのねー」

私は、パパに向けて一生懸命お喋りをする。静かに聞いてくれるパパ。

幸せだ——

また、思う。

アル兄ちゃんのシルデイ・ナーラで、バラバラになりかけた私たち家族が、こうしてまた穏やかな時間を過ごしている。あ、シルデイ・ナーラっていうのは、精霊との契約のことだよ。パパとアル兄ちゃんは、大精霊と契約してるんだ。その契約のための儀式（？）は、命をかけるほど大変なものだった。あの時のアル兄ちゃんは、アル兄ちゃんでありながら、アル兄ちゃんじゃなくて……

うん。本当に幸せだなあ。私、シルデイ・ナーラの時、頑張つて良かった。リリちゃん、結構体張つたんだよ！ 大好きなアル兄ちゃんを絶対に失いたくはなかったから……

パパの隣で、私は幸せに浸つた。

シウトワール家は、今日も平和です。

+

大変大変！ 事件だ！ シウトワール家に、緊張が走る。

シウトワール家の本家、ラグフェル侯爵家の伯父さん一家がやって来るのだ！

朝から、屋敷中が殺気立っている。

その理由は、パパのお兄さんであるヴァルグランツ伯父さんにある。伯父さんは、この国でも有数の名家であるラグフェル侯爵家の当主。でもって、その身分に相応しく、凄く厳格な方なのだ。面差しはパパに似てるけど、眼光の鋭さはパパ以上だ。

だから、使用人さんたちもピリピリしちゃうんだよね。

リリちゃんは、平気だけでも。だって、伯父さんは厳しいところはあるけど、そんなに怖くないって、アル兄ちゃんのシルデイ・ナーラの時に分かったもん。あの時、リリちゃんちよつと伯父さんとお話ししたんだ。伯父さんは立場柄、冷たいと思われる態度をとらなくてはいけないこともあるんだって、その時知つたんだ。だから、もう平気だよ！

……兄ちゃんたちは、違うみたいだけど。

二人して、朝から青い顔で右往左往している。苦手意識が植えつけられてるね！

「ディアス、俺の服おかしくないか？」

「大丈夫だよ。ねえ、僕の方こそおかしくない？」

「大丈夫だ」

「良かった」

といった具合である。情けなや。

「兄ちゃんたちは、余を見習い、泰然とした方が良いぞ」

バツチリめかしこんだ私は、余裕綽々でそう言った。そして、兄ちゃんたちに睨まされた。解せぬ。

「リリ、くれぐれも言葉遣いには気をつけてね」

「絶対、粗相するなよ？」

「分かってるよー」

信用ないのである。酷いよ、兄ちゃんたち。リリちゃんだって、ちゃんとできるんだから！

淑女の礼儀作法だって、ディアナさんから習ってるもん！ あ、ディアナさんは、私

やアル兄ちゃんの家教師だよ。前は、我が家に住み込んでただけど、今は結婚して、

離れて暮らしている。眼鏡の似合う、クールビューティーさんだ。

「ディアナさん直伝の技、とくとご覧あれ」

「リリ……」

ん、なんだいなんだい。二人して、「駄目だ、この子」って顔して。本当に、失礼だよ。

「リリちゃん、本当にできる子なのに……」

がっかりだよ。ぶうぶう。

おっと、伯父さんの馬車がやって来るのが窓から見えた。

途端に口を閉ざす兄ちゃんたちは、実に分かりやすい。

「ほらほら、伯父さんたち来たよー。しゃっきりして！」

「ああ……」

「うん……」

駄目だこりゃ。すっかり固まってるよ。ふむ。伯父さん、怖くないのにな。程なくして、私たちは応接室に呼ばれた。兄ちゃんたち、頑張れー！

伯父さんは、相変わらず眉間の皺しわが凄しい人でした。

敵たかしい表情で、私たちを見ている。同じソファーに伯母さんと、従姉いとこのウエルナお姉ちゃんが座っている。

伯父さんの右隣に座るウエルナお姉ちゃんは、兄ちゃんたちより四歳年上なのだ。金茶色の髪は肩を越すぐらいの長さで、サラッサラ。優しいお姉ちゃんだ。ウエルナお姉ちゃんと目が合うと、にっこり微笑んでくれた。わーい、ウエルナお姉ちゃん。

そして、伯父さんの左隣に座る伯母さんは、さっすがウエルナお姉ちゃんのお母さんなだけあって、笑い皺しわが穏やかに刻まれた優やさしそうな人だ。

——さて。今回の伯父さん一家の訪問の理由は、伯母さんの抱くおくるみにある。

そう！ ラグフェル侯爵家に、待望の跡継ちやくぐいぎが生まれたのです！ 嫡男ちやくなん様ですよ！  
アル兄ちゃんのシルデイ・ナーラ事件の時に、伯母さんが我が家に来てなかったのは、臨月だったからなのです！

「おめでとうございます、兄上」

「うむ。妻が頑張ってくれたのでな」

パパの言葉に対して、伯父さんが穏やかに答えた。

皆の視線が集まっている赤子様は、お口をむにゃむにゃさせている。可愛い！ リリ

ちゃんもあんなだったのかな？ ……多分、あんなだった！

「アルスカインというのですよ」

「まあ。素敵はな名前ですな」

ママが誉ほめる。伯母さんは、私にそっとおくるみを差し出した。さ、触ってもいいのかな。

私は、恐る恐るアルスカインに近づく。アルスカインのまんまるな目が、私を見ている。

私は、ちょんちょんとアルスカインのぷくぷくほっぺを突つついた。柔らかい感触に、顔かほが緩ゆるむ。

「ほほほ、リリアーナはアルスカインを気に入ってくれたようね」

「はい！ 妻く可愛らしいです！」

アルスカイン、よろしくね。リリオ姉ちゃんだよ。

ママたちは、母親同士で会話を始めた。

パパと会話する伯父さんも心なしか嬉うれしそう。良かったね、伯父さん！

部屋の中は和とやかな空気だ。でも、もぞもぞなんだか落ち着かない！ ということで、私たちは赤ちゃんを除く子供組で、お庭で遊ぶことにした。

兄ちゃんたちはほっとしたようで、こっそり息を吐いている。伯父さんのこと、本当に苦手なんだね！

部屋から出た私たちは、兄ちゃんたちの剣術の稽古けいこを見ることにした。ウエルナお姉ちゃんが、興味があると言ったからだ。

ウエルナお姉ちゃんに良いところを見せようと、兄ちゃんたちは張り切りさっそく着替えに行った。だから、今、私はウエルナお姉ちゃんと二人きりで鍛練場たんれんばにいる。後でメイドさんが椅子を持ってきてくれるはずだ。

私は、ウエルナお姉ちゃんを窺うかがい見る。年頃になったお姉ちゃんの横顔は、とても綺麗で、そして寂しげだった。——ウエルナお姉ちゃん？

私は、ウエルナお姉ちゃんの手を握る。

「リリちゃん？」

ウエルナお姉ちゃんは、不思議そうに私を見る。ウエルナお姉ちゃんは、人に心配を掛けまいとする人で、我慢強いのだ。だから、私は一歩踏み込むことにした。

「ウエルナお姉ちゃん、寂しいの？」

「え……？」

「とても、寂しそうなお顔してる」

私の言葉に、ウエルナお姉ちゃんは軽く目を開く。そして、微かに笑った。

「……跡継ぎ、生まれちゃったなって思ったの」

ポツリと、呟く。

「あ……っ！」

呟きの意味に気づいて、私は口を押さえた。

そうだ。ウエルナお姉ちゃんは、本家の唯一の子供だったのだ。

デイン王国では、爵位は男子しか継ぐことができない。だから、その家の子供が女子のみの場合は、婿むこを迎え爵位を継いでもらうのだ。

侯爵家の爵位だ。欲しい人はたくさんいる。つまり、ウエルナお姉ちゃんは選べる立場で、相手は貴族のみとはいえ、望んだ人と結ばれることが可能だったのだ。

しかし、跡継ぎが生まれたことで、ウエルナお姉ちゃんの立場は複雑なものになってしまった。

ウエルナお姉ちゃんは、他家へお嫁に出されることになるのだろう。その時、自由に相手を選べるかどうか……。それは分からない。

「……お姉ちゃん」

「ふふ、リリちゃんは賢いのね」

お姉ちゃんが、私の頭を撫でる。

同じ女として、ウエルナお姉ちゃんの気持ちは分かるつもりだ。

好きな人と添い遂げられないかもしれない、複雑な気持ちは。

だって私、恋してるから。

「リリちゃんは、好きな人いるのよね」

「うん……」

ウエルナお姉ちゃんは、微笑んだ。とても、綺麗な笑顔だ。

「リリちゃんは、好きな人と幸せになってね。応援してる」

「……うん！」

正直、私の恋も実るかどうかは分からない。何せ、相手が相手だし……。でも、ウエルナお姉ちゃんの気持ちには応えたいと思ったのだ。

「おい、リリ。姉さん」

「お待たせしました、姉様」

兄ちゃんたちがやって来た。私とウエルナお姉ちゃんは顔を見合わせる。

ウエルナお姉ちゃんは、口に人差し指を立てた。うん、分かった。女同士の秘密、だ

よね！

メイドさんが運んでくれた椅子に座り、私たちは兄ちゃんたちの稽古の観戦をする。

伯父さん一家の訪問は、おめでたい知らせと、ある少女の寂しさを私に教えてくれた――

伯父さん一家の来訪から数日後。余は、木の陰に身を隠しておる。皆の者、静かにな。敵は、直ぐ近くまで来ておるのだ。なんたる不覚。よもや、敵の勘がこうまで鋭いとは思いませんかった。

ここは、我が家の庭だ。余には地の利があるはずなのに、ここまで追い詰められようとは。不覚じゃ。くうっ、泣けてきおる。

かさり。草を踏む音がする。

不味い、余がここにいると勘づかれたか！ 奴は、手強いのじゃ！

余は、故あってここから動けぬ。そういう決まりなのだ。

困った。余は、負けとうない。勝ちたいのじゃよう。

かさり、かさり。足音が近づいてきよる。ああ、最早これまでか。

「リリちゃん、みーつけた」



「あー、みつかつちやつた」

もーう、ララちゃんたら！ 直ぐ見つけるんだもん。かくれんぼで探すの、上手すぎる！

「次は、リリちゃんが鬼ね」

「うん。分かった！」

私の言葉を合図に、ララちゃんは走り出す。

さて、私も目隠しして、数を数えるかな！

今日は、我が家にララちゃんが遊びに来てくれている。最初は子供部屋で、ぬいぐるみを使っておままごとしてただけだね。気がついたら、旦那役の私の浮気がバレて、奥さん役のララちゃんが迫真の演技で泣いて。それで、浮気相手役のうさしゃんが悲しい末路を辿つちやつたんだよね。いやあ、熱中した！

それで、そんな私たちを目撃したアル兄ちゃんに、もっと健全な遊びをしなさいと外に出されちゃったのだ。アル兄ちゃん、泣いてたよ。あれー？

そんなわけで、私たちは健全なくれんぼを始めたのだ。

「もーいーかーい」

「まーだだよー」

おや、まだなのか。ララちゃん、時間掛けてるね！

ララちゃんが友達になつてくれてから、毎日が楽しい。

こうやって、兄ちゃんたち以外の誰かと遊ぶのは久しぶりだ。

「メル……」

思い出すのは、三人の精霊たちがいて、毎日が賑やかだった頃のこと。

突然会えなくなつてしまったみんな。まだ、胸は痛む。——けど。

「もーいよいよー」

ララちゃんの声がする。

ララちゃんがこうして遊んでくれるようになって、私の心は癒されつつある。

メルたちとララちゃんは、比べようがない存在だけど。でも今、ララちゃんは、確実に私の大事な部分にはめ込まれていつている。とつても大切な友達だ。

「よっしゃ！ 探すぞー！」

私は、走り出した。

ララちゃんは、探せば見つかる。

そのことが、無性に嬉しかった。

とある日の、昼下がり――

私は、自室でうさしやんを抱かかえてうずくまっていた。

もう、我慢の限界だ。私、よく耐えた方だと思っよ!?

うさしやん抱えたまま、私は床をごろんごろんする。

「うー、うー……っ!」

あー、苛々する。鬱憤うつげんが、積もりに積もっているのだ。これは、いかん。何とかせねば、大変なことになる。主にリリちゃんが、ストレスで!

「にゅーう……っ!」

うさしやんを背負い投げする。うさしやんは綺麗な放物線を描き、お部屋の隅に飛んでいく。

うさしやんは、ころころと転がっている。

言っておくが、お気に入りのぬいぐるみである。

私は、すくりと立ち上がった。

「……そうだ、ルデイ兄ちゃんに会いに行こう」

そうだ、そうだ。ルデイ兄ちゃんがいた。私の、この鬱屈うつくつした思いをルデイ兄ちゃんならば分かってくれるはずだ。

しかも、おあつらえ向きに今の我が家には、ルデイ兄ちゃんと私しかない。あ、使用人さんたちはいるよ!

ママは、とあるご婦人が主宰するお茶会に出掛けているのだよ。シフトワール家は、貴族ではないとはいえ権限は貴族並みだから、貴族のご婦人からのお茶会のお誘いが頻繁にあったりするのだ。ママは、そういった集まりには必ず参加している。貴族のお茶会って、色んな情報が集まるんだって。ママ、大変だなあ。

アル兄ちゃんは、パパと一緒に騎士団に行ってる。将来の騎士団長だからね、早い内から騎士団員に顔を見せておくのだから。流石さすがは、我らが長男。お忙しいことで。

……べ、別にパパを独り占めできて羨うらやましいとか、アル兄ちゃんがいなくて寂しいとか、お、思っていないんだからね! か、勘違いしないでよね!

「つーん、だ」

ツンデレキャラと化した私は、顔を逸そらせてうさしやんを拾い上げる。

そして、部屋の扉へ向かう。いざ行かん、ルデイ兄ちゃんのもとへ!

ルデイ兄ちゃんは、鍛練場たんれんにいた。双剣を手に、訓練はげに励んでいた。ルデイ兄ちゃんの努力家め！

しかし、ルデイ兄ちゃん。朝から姿が見えなかったけど、ずっとここにいたのかな。だとしたら、凄い集中力だ。

まあ、それを邪魔するのがリリちゃんなんですけど。

「ルデイ兄ちゃん」

声を掛ければ、ルデイ兄ちゃんは動きを止めた。そして、私を見る。

「リリか」

ルデイ兄ちゃんは、双剣を地面に置いた。

存在を認識された私は満足感たっぷりに頷き、それから口を開いた。

「余は、余のために存在するのだ！」

その台詞せりふを口にする、体が感動から痺しびれる。

言っちゃった！

「お、おう。いきなり、どうした」

私の突然の余口調に、ルデイ兄ちゃんは困惑気味だ。まあ、そうだろう。だが、止め

るわけにはいかないのだ。

「ふん、余の崇高すうこうなる精神が分からぬとは！」

「リ、リリ……？」

「余は、稀まれなる存在じゃ。そなたが、余の言葉に戸惑うのも仕方ないの」

「リリさーん？」

悦に入った私を止められる者など、いないのだ。

「して、ルデイよ。そなた、何をしておったのだ」

「え、いや。訓練を、だな」

「そうか！ ルデイは、勤勉けんみんなのだ。余は感動した。誉ほめてつかわす」

偉偉そうな言動の割には、私はルデイ兄ちゃんに抱きついたり、甘え放題だ。ルデイ

兄ちゃん、すりすり。

「余も、ルデイの努力する姿を見習わねばならぬと痛感したぞよ」

「リリ、本当にどうかしたのか？」

ルデイ兄ちゃんが真剣な表情で、私の肩を掴む。うむ、くるしゅうない。

「何じゃ、余がどうかしたかの？」

私は、小首を傾かげて上目遣いでルデイ兄ちゃんを見る。んー？

「いや、行動はリリだな。甘えん坊だし、あざといし……」  
 「そんなに誉めるな、ルデイよ。照れるではないか。確かに余は至高なる存在だからして、誉め称えられるのは当然じゃて」

「とうるか、言葉遣いがおかしいし、誉めてないし」

「なんじゃと！」

え、今の誉められたんじゃないの!? がーん！ いい気になったリリちゃん、恥ずかしい！

「あと、兄ちゃんを呼び捨てにはいけません」

「あだっ！」

私の頭に、ルデイ兄ちゃんの手刀が落ちた。痛い。手加減されてるけど、地味に痛い。

「何をするのじゃ！ ルデイ……兄ちゃん！」

私の抗議に、ルデイ兄ちゃんは涼しい顔をして腰に手を当てている。

うぬう！ さっきまで、あんなにも動揺してたくせに！

「リリー」

「う……、な、何じゃ」

ルデイ兄ちゃんに真っ直ぐ見詰められ、私は言葉に詰まる。

まさか、呼び捨てにしたことをまた叱られるとか……？ あわわわ。

しかし、覚悟したお叱りはいくら待ってもなく、それどころか頭を撫でられてしまう。

あ、あれ……？

「ル、ルデイ兄ちゃん……？」

「仕方ないな」

そう眩くと、ルデイ兄ちゃんは私を抱き上げた。おお、ルデイ兄ちゃん力持ちー！

「……寂しかったのか？」

「へ……？」

突然のルデイ兄ちゃんの言葉に、私はぼかんと口を開ける。寂しい？ 誰が？ この愛されまくっているリリちゃんが？ まさか。

私の反応に、ルデイ兄ちゃんは怪訝そうに眉をひそめた。

「違うのか？ 今日、父さんや母さんどころか、ディアスもないし……。だから、

てつきり寂しいから珍妙な口調にしてるのかと……」

「ち、違うよー！」

まさか私の余口調が、そんな誤解を生むとは！

私は、ただ……

「ルデイ氏、ルデイ氏。下ろしてくれたまえ」

「……また、変な呼び方を」

変な呼び方とは、失礼な。前世の一部の人間の間での、正式な呼び方だというのに。ルデイ兄ちゃんは、分かってないな！

ルデイ兄ちゃんは呆れながらも、私を下ろしてくれた。ふう、やれやれだぜ。

私は、抱えたままのうさしやんを、ぐにーと伸ばしながらルデイ兄ちゃんを見上げる。「いったい、どうしたんだ。俺の可愛い妹様は」

「……えっとねー」

ルデイ兄ちゃんに、妙な心配を掛けてしまっているようなので、私は素直に白状した。……前世のアニメが、恋しくなったのだと。

あんなに大好きだったアニメが、今は見られない。少ないお小遣いを遣り繰りして、アニメ関連グッズを買う。そんなことは、もうできないのだ。

そして、何より一番こたえるのは、アニメの話を誰ともできないことだ。

前世の私、「なな」は、幸いにも同じアニメ好きの友人に恵まれていた。ほぼ毎日語り合うことが可能だったのだ。

休日は、皆でアニソン縛りのカラオケまで行った。白熱した楽しい思い出。恵まれ

過ぎていく。羨ましい、妬ましい！

私だって、語りたいよー！

そんな熱き情熱が、私の中で暴れまわり、今日の奇行となったのだ。

「……つまり、前世を知る俺に突撃したわけだな」

「誠に、すまんかった」

アニメの主人公に成りきるだけでも、気分がだいぶ違うんだよー！

お陰で、スッキリした！ 心は、テッカテカだよ！

これも全て、ルデイ兄ちゃんがいてくれたからだ。ルデイ兄ちゃん、ありがとう！

「余の気分は、スッキリじゃよー」

私は、ルデイ兄ちゃんの周りをくるくる回る。わーい、ルデイ兄ちゃん〜！

ルデイ兄ちゃんは、はあとため息を吐いた。そして、呆れ顔で私を見る。

「まあ、役に立ったようでも何よりだよ」

「うん！ ありがとう、ルデイ氏」

「だから、呼び方……」

ルデイ氏呼びは、不評のようだ。非常に残念だよ。

うむ、仕方ない。この呼び方は封印するかの。

「うさしちゃん、残念だね」

「うさしちゃんも、俺に同情してくれているよ」

疲れたような顔をする、ルデイ兄ちゃん。顔に出過ぎだよ。

「まあまあ、ルデイ兄ちゃん。リリちゃんは楽しかったから」

「ああ、良かったな」

ルデイ兄ちゃんに頭を撫でられる。てへり。

「ルデイ兄ちゃん、ルデイ兄ちゃん」

「何だ」

「リリちゃん、ルデイ兄ちゃん大好き！」

「そうか、俺もだよ」

軽く流されてしまった！ まあ、事あることに言っているからね。自重じちようも大事かな。

「……まあ、稽古けいこもキリがついたから。屋敷に帰るか？」

「うん！」

私は、ルデイ兄ちゃんと手を繋つなぐ。直前まで剣の稽古けいこをしていたからか、ルデイ兄ちゃんの手はほんのり汗あせばんでいた。

「お手を繋ぐの、楽しいねー！」

「そうだな」

「……ママたち、まだ帰って来ないね」

「ああ、寂しいな」

パパたちも、今日は遅いだろうな。あ、パパはいつも遅いか。ぐすん。

「……やっぱり、リリ寂しかったんだな」

「……うん」

私の奇行には、前世のアニメを語れないという不満もあったけど。でも本当は、今日は朝から誰ともかわれなかった不満があったかもしれない。ほら、いつも、皆に可愛がられているから。ちやほやだよーう。

「で、でも。ちよびつと寂しいだけだもん」

「そうか」

「そうだよ」

今はルデイ兄ちゃんといっぱいお喋りしゃべりできて、幸せだもん。リリちゃん、ごっ機嫌。

「母さんは、そろそろ帰ってくるからな」

「うん！」

ママ、早く帰ってきてね！

そんな話をしながら、私たちは屋敷へと向かった。

私は欠伸をかみ殺しつつ、玄関ホールに立っていた。うさしさんと一緒にアル兄ちゃんを待っているのだ。もう夜遅いのに、アル兄ちゃん、まだかな……。必死で眠気と戦っていると、人の気配がした。

帰ってきた！

アル兄ちゃんは、ずいぶん遅い時間に帰ってきた。だけど、アル兄ちゃんと一緒だったはずのパパはいなかった。今夜は宿舎に泊まり込みかもしれない。がくり。

「リリ！ まだ、起きてたの!？」

アル兄ちゃんが驚いている。それはそうだろう。いつもの私なら、とつくにベッドの住人の時間なのだから。因みに、凄く眠い。

「アル兄ちゃん」

「なに、リリ?」

私は、うさしさんを抱き締めアル兄ちゃんを見上げる。私には、重要な使命があるのだ。ぼっぱーん。

「お仕事、ご苦労であった。余は、そんなに頑張るアル兄ちゃんを、誇りに思うぞ」

そう。頑張ったアル兄ちゃんを労う、という使命のため、この時間まで起きていたのだ。くあー、眠い。

「へ……………」

アル兄ちゃんは、ポカンと口を開いた。兄ちゃん、兄ちゃん。お間抜けな顔になってるよ。美少年が、残念なことになっているよ！ 危ないよ！

「うむ。余の労いにそこまで感動するとはの。余も眠いのを、我慢した甲斐があった」  
うむうむと頷く私。

アル兄ちゃんの肩が、ぶるぶると震えている。おや?」

「ア、アル兄ちゃん……………」

何だか、顔色が悪い気がする。おやおや、口元が引きつっている。あれ、嫌な予感が……………」

ポタリ。玄関ホールの絨毯に、染みが一つ。ポタリ。二つ。

アル兄ちゃんの両目から、涙が零れていた。

「アル兄ちゃん!？」

「リリ……………、僕は自分が不甲斐ないよ」

泣きながらそんなことを言う、アル兄ちゃん。ど、どうしちゃったの!？」

周りにいる使用人さんたちも、ざわついているし！

「僕が不甲斐ないから、リリの言葉遣いが変なんだね」

「え……っ」

「ごめんね、リリ……」

アル兄ちゃん、どうやら私の余口調に衝撃を受けて泣いてしまったようだ。

あれー？ いつもだったたら、軽く諫める程度なのに……。アル兄ちゃん、どうしちゃったのー!?

「坊っちゃん、今日は本当にお疲れなのでしょう」

我が家の家令、アルベルトさんが、ハンカチを出してアル兄ちゃんを気遣うように言った。

そうか、アル兄ちゃん。騎士団に顔を出して緊張してたんだ。

それなのに、私が余口調を披露したから緊張の糸が切れたんだな。悪いことしちゃったな。

「ごめんね、アル兄ちゃん」

「リリ……」

素直に謝れば、アル兄ちゃんの涙は止まった。良かった、良かった。

しかし、ホッとしたのもつかの間。アル兄ちゃんに、肩を掴まれてしまう。

「ア、アル兄ちゃん？」

「リリ、安心してね。リリの言葉遣いは、僕がすっかり直してあげるから！」

と、凄みのある笑顔で言われてしまった！

え、それは、ちよつと……

「あ、リリちゃん。もう眠いから、お部屋に戻るよー」

とりあえず、私は逃げた。素早く、後ろも振り返らずに逃げ出した。アル兄ちゃん、怖い。

それから暫くの間、私とアル兄ちゃんとで、私の言葉遣いに関する攻防が続くのであった。

調子に乗るもんじゃないって、痛感した出来事でした！



## 第2章 学校生活

皆の者、元気かな。リリちゃんだよ！ 季節は、ルーズ……春を迎えました！  
なんとリリちゃん、リリちゃん！

学校に通えるようになりましたー！

ディーン王国は、前世の日本と同じく、春で年度を区切ってるみたい。つまり、今年六歳になるリリちゃんは、学校に通える条件を満たしているわけです。ぱっぱーん！

私に通っている幼等学校は、王室が支援していて、貴族だけじゃなく、一般家庭のお子さんにも広く門戸を開けている学校なのだ！

つまり！ ララちゃんと一緒に勉強できるってことなんだよ！ やっほーい！

私の場合は、シュトワール家が正確には貴族ではないとはいえ権限は有るから、王国内にもう一つある貴族の子供御用達ごようたしの幼等学校にも通えるのだから。

でも、ほら。勝手な想像だけど、周りが貴族ばかりって息苦しそうっていうか。私は、もつとのびのび育ちたいのだよ。しかも、ララちゃんがいなくてきたら、ねえ。私の選

ぶ道は一つしかない。

という流れで、私は貴族や平民の垣根がないという、ラッツフェル幼等学校に通っています。アル兄ちゃんが通っていた学校だからっていうのも、大きな要因かな。でもアル兄ちゃんは卒業しちゃってもういないんだだけね。残念！

覚えることがたくさんで、毎日楽しいよ！

今もね！ 学校へ向かっている馬車の中なんだ。

「リリアンナ様、ルー様宅に着きましたよ」

馬車を止めて、御者ぎょしやさんが教えてくれる。

ルー様宅というのは、ララちゃんのお家のことね。

窓から外を見れば、赤い屋根のお家から、学校指定の鞆を肩に下げたララちゃんと、ララちゃんのお父さんが出てくるのが見えた。

「ララちゃん！」

私は、馬車の扉から身を乗り出す。

「リリちゃん、おはよう」

ララちゃんは、ふんわりとした笑顔で駆け寄ってくる。うん、癒いやされる。

「いつも、すみません。お嬢さん」

「いいのです、私も毎朝が楽しいですから  
ララちゃんのお父さんが頭を下げるので、私は慌てて言う。私だって、こんなちゃんとした言葉遣いできるんだよ。」

ララちゃんと私は、毎朝一緒に登下校している。

「いつも、送り迎えありがとう」

「ううん、気にしないで」

ララちゃんのお家は、幼等学校への通り道にある。場所も我が家から近いしね。

学校への行きの手いでもあるし、何より私が一緒に登校したいのだ。

「今日も、頑張れよ」

「うん。お父さんも、お仕事頑張ってるね」

馬車に乗ったララちゃんが、扉から顔を出しお父さんと話している。あ、ララちゃんのお父さんはなんと！ パパの騎士団の人なのだ！ パパの騎士団の人は、私をお嬢さんと呼ぶんだよね。

「では、娘さんをお預かりしますね」

「よろしくお願いします」

ララちゃんのお父さんとそう会話したところで、馬車の扉が閉まる。

「お父さん、いってきます」

「いってらっしゃい」

朝の、和やかな風景である。

いつもなら、ララちゃんのお母さんもいるのだけど、今はお里帰りしてるのだった。

ガラガラと車輪が音を立てて、動き出す。

「ララちゃん、宿題やった？」

「うん、頑張ったよ」

私たちは、馬車の中で学校のことなどを話しながら過ごした。

王立ラッツフェル幼等学校は、先々代の王妃様が建てて下さった学校でなかなか規模が大きい。そして先代の王様が建て替えを行ったばかりだから、ピッカピカだよ。

幼等学校は六歳から九歳の子供が通うのだけど、国中の子供がいるのではと疑ってしまっぐらいの生徒数を誇る。実際は、王都に住んでる子供だけなんだろうけども。王都も、広いからなあ。

主に使用されるのは本館と呼ばれる建物だけど、他にも図書館や武道館、多目的ホールなど、多くの建物が存在する。